みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

ネワール法界マンダラ図像資料

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): Newar Buddhism	Kathmandu	mandala	Dharmadhatu Mandala	Manjushri 作成者: 立川, 武蔵 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004110				

ネワール法界マンダラ図像資料

立　川　武　蔵*

Materials for Iconographic Studies of Newar Dharmadhatu Mandalas

Musashi Tachikawa

ネパールのカトマンドゥ盆地には今日，ネワール人の間に密教の要素を多分に含む大乗仏教が見られる。ネワール仏教には数多くのマンダラの作例が残る一方で，今も伝統に従ってマンダラが描かれている。ネワール仏教の寺院境内などには銅などの金属や石の円盤の上に線刻されたマンダラ図が見られるが，この様式はネワール特有のものと思われる。ネワール仏教マンダラの内，もっともよく知られたものの一つに，法界語自在文殊のマンダラがある。本稿は，カトマンドゥ盆地内において有名な法界マンダラの作例としてハク・バハール寺院，ノ・バハール寺院，ブ・バハール寺院のマンダラを取りあげ，その線刻された図像を大乗仏教図像学の基礎資料として提供しようとするものである。

The present paper is intended to furnish materials for iconographic studies of the Newar Buddhist mandalas found in the Kathmandu Valley. A large number of mandalas depicted on copper or stone plates are installed at various places, such as the court yard of a Newar Buddhist temple,or at a crossroads in a town.

The Newar people inherited Mahayana Buddhism together with its iconographic tradition from India, before Indian Mahayana Buddhism disappeared in the thirteenth century A.D.. The varieties of Newar Buddhist mandalas found in the Kathmandu Valley are almost identical to those of the Indian Buddhist mandalas explained in texts, such as the *Niṣpannayogāvalī* or the *Vajrāvalī*. Even today Newar painters con-

* 国立民族学博物館民族社会研究部

Key Words : Newar Buddhism, Kathmandu, mandala, Dharmadhatu Mandala, Manjushri

キーワード：ネワール仏教，カトマンドゥ，マンダラ，法界マンダラ，文殊

tinue drawing mandalas according to their tradition, which is very similar to the Indian one.

The Dharmadhātuvāgīśvara Mañjuśrī Mandala is one of the most well-known manadalas in the Kathmandu Valley. In this paper we will consider the Dharmadhātuvāgīśvara (or Dharmadhātu) mandalas of three Newar Buddhist temples in Patan City, namely, the Haka Bahal, the Na Bahal, and the Bu Bahal. The images of the deities depicted on these three mandalas are iconographically in accordance with the description given in the Dharmadhātu Chapter of the *Niṣpannayogāvalī*, with some exceptions.

1. カトマンドゥ盆地における法界マンダラ資料
2. 法界マンダラの構造
3. ハク・バハールの法界マンダラ
4. ノ・バハールの法界マンダラ
5. ブ・バハールの法界マンダラ

1. カトマンドゥ盆地における法界マンダラ資料

ネパールのカトマンドゥ盆地にはインドから伝えられた大乗仏教が残っており，この大乗仏教は密教（タントリズム）の要素を多分に含んでいる。この仏教密教はカトマンドゥ盆地に紀元4，5世紀から住んでいるネワール人の間に流布しているものであるが，ネワール仏教徒たちは自分たちの仏教を「金剛乗」（ヴァジュラ・ヤーナ）と呼んでいる。この場合の「金剛乗」とは仏教密教というほどの意味であって，ラダック地方，中央チベット，ブータンに伝えられた仏教密教と本質的に異なるものではない。チベット仏教では「金剛乗」（ドルジェ・テクパ）とは仏教密教一般を意味する。

カトマンドゥ盆地には，仏教密教の儀礼や瞑想の補助手段としてのマンダラが数多く残るとともに今もなお制作されている。マンダラは，原初の形態は別にして，今日では平面に描かれるものと立体に作られるものとの二種あるが，カトマンドゥ盆地では銅や真鍮あるいは石の盤にマンダラ図を線刻し，その盤を円筒，六角筒，八角筒等の上に乗せたかたちのマンダラが数多く制作されてきた。この円筒，六角筒，八角筒等は須弥山（スメール山）をかたちどった須弥山台であり，北京の紫禁城などに見ることができる。しかし，須弥山台の上に線刻した平面マンダラを乗せた形式のものは，

カトマンドゥ盆地以外の地域にあるとの報告はなく，盆地に特有のものと思われる。

カトマンドゥ盆地の須弥山台上のマンダラは寺院の境内や街角に置かれており，その数は数百にのぼると推定される。ほとんどが直径数十センチメートルのものであり，その程度の大きさのマンダラでは個々の尊格のすがたは刻まれておらず，諸尊が○印等で表現されたり，各尊格の「部屋」のみが描かれている。しかし，1メートルに近い，あるいはそれ以上の大きさのマンダラ図を刻んだ銅盤あるいは石盤が盆地にはいくつか残されており，それらには，マンダラの諸尊すべてではないにしても数多くの尊格の図像が描かれており，ネワール仏教パンテオンの図像学的資料となる。

インド，ネパール，チベット等における仏教密教においては，パンテオンの図像学的システムが確立されており，密教の儀礼・実践に際して僧あるいは実践者たちはパンテオンの各メンバーすなわち各々の尊格の図像学的特徴を憶えている必要がある。例えば，各々の尊格がどのようなシンボルを持っているかが密教の儀礼・実践では重要であるからだ。

カトマンドゥ盆地の寺院の境内などに置かれている「マンダラ台」（須弥山台の上に置かれたマンダラ盤）は，圧倒的に法界語自在文殊（ほっかいごじざい）マンダラ（法界マンダラ）が多い。その中では特に五つの法界マンダラが図像学的および歴史的に重要と思われる。第一にはスヴァヤンブーナート仏塔の東側にあるプラターパマッラ王の命によって製作されたもの（立川 1989: 16），第二にはパタン市のハク・バハール（ハカー・バハール）寺院[1] 境内のもの（立川 1989: 14），第三にノ・ハバール寺院[2] 境内のもの，第四にブ・バハール寺院[3] 境内のもの（立川 1989: 18），第五にスヴァヤンブーナート寺院境内の石製マンダラ[4]（立川 1989: 16）である。第一のものがもっとも古く，図像学的価値も高いと思われるが，銅版の上に描かれた図像の磨滅した部分も少なくなく，このマンダラの図像学的考察は次回に俟ちたい。第五のマンダラでは尊格は人形の図像ではなく，樹や花などのシンボルによって描かれている。このマンダラに関する研究も次の発表の機会を俟ち，今回は第二，第三および第四のマンダラの考察に限定することにしたい。

第二，三，四のマンダラは諸尊の配置や図像等に関して多くの共通点がある。それぞれの尊格の図像が4センチメートルに満たないほど小さい場合もあるが，むしろそれだからこそ図像学的にはもっとも重要な特徴のみが彫り刻まれていると考えることができる。現在，われわれにはネワール密教のパンテオンに関する満足すべき――つまり使用に耐える――図像集が残されていない。本研究の目指すところは，ネワール密教の図像集の作成である。法界マンダラは，ネワール密教にもっとも重要なマンダ

ラであるとともに，約220尊という数多くの構成員を有するマンダラであり，図像集作成のための基礎資料として最適である。

またかの三つのマンダラのレプリカが国立民族学博物館の南アジア常設展示場で展示されている[5]。これらは，カトマンドゥ盆地でそれぞれのマンダラ図を拓本に取り，パタン市の工人たちに依頼して約一年間かけて1996年完成したものである。実際に線刻するにあたって「それぞれの寺院でマンダラを見てもはっきりしなかった部分は，ネワールの画家ガウタム・R・バジュラーチャールヤに依頼して絵を描いてもらった」と完成後に聞いた。本研究には，カトマンドゥ盆地のマンダラ図と国立民族学博物館のレプリカの図との比較は含まれていない。レプリカといえ，現在のネワールの工人が拓本と実物のマンダラ図をどのように読みこんだかはそれ自体図像学の対象となり得ると思われるが，このレプリカの考察も別の機会に俟ちたい。

2. 法界マンダラの構造

12世紀頃の編纂と推定されるサンスクリットで書かれたマンダラ集成『完成せるヨーガの環』は，ネワール仏教僧たちのマンダラに関する基礎文献の一つである。この第21章が法界語自在文殊マンダラ（法界マンダラ）の構造やパンテオンのメンバーを説明している。この章のテキスト，和訳，パンテオンのそれぞれのメンバーのイメージ等に関しては，すでに（長野・立川 1989）に発表した。

ここで扱う法界マンダラの諸尊の名称と位置は基本的には『完成せるヨーガの環』第21章と一致する。したがって，本論文では（長野・立川 1989: 48–61）に記した尊名と位置に基づいて議論を進めたい。以下に，法界マンダラの構成メンバーの日本名とサンスクリット名のみを挙げておきたい。

表1　法界マンダラの諸尊

番号　サンスクリット	漢訳／仮名表記
1. Mañjughoṣa	［法界語自在］文殊
(Dharmadhātuvāgīśvara)	（マンジュゴーシャ）
2. Mahoṣṇīṣa	大仏頂（だいぶっちょう）
3. Sitātapatroṣṇīṣa	白傘蓋仏頂（びゃくさんがいぶっちょう）
4. Tejorāśyuṣṇīṣa	光聚仏頂
5. Vijayoṣṇīṣa	最勝仏頂
6. Vikiraṇoṣṇīṣa	捨除仏頂
7. Udgatoṣṇīṣa	高仏頂

8. Mahodgatoṣṇīṣa	高大仏頂
9. Jayoṣṇīṣa	勝仏頂
10. Akṣobhya	阿閦（あしゅく）
11. Vajrasattva	金剛薩埵（こんごうさった）
12. Vajrarāja	金剛王（こんごうおう）
13. Vajrarāga	金剛愛（こんごうあい）
14. Vajrasādhu	金剛喜（こんごうき）
15. Ratnasambhava	宝生（ほうしょう）
16. Vajraratna	金剛宝（こんごうほう）
17. Vajrateja	金剛光（こんごうこう）
18. Vajraketu	金剛幢（こんごうどう）
19. Vajrahāsa	金剛笑（こんごうしょう）
20. Amitābha	阿弥陀（あみだ）
21. Vajradharma	金剛法（こんごうほう）
22. Vajratīkṣṇa	金剛利（こんごうり）
23. Vajrahetu	金剛因（こんごういん）
24. Vajrabhāṣa	金剛語（こんごうご）
25. Amoghasiddhi	不空成就（ふくうじょうじゅ）
26. Vajrakarma	金剛業（こんごうごう）
27. Vajrarakṣa	金剛護（こんごうご）
28. Vajrayakṣa	金剛牙（こんごうが）
29. Vajrasandhi	金剛拳（こんごうけん）
30. Locanā	ローチャナー（仏眼）
31. Māmakī	マーマキー（摩摩<ruby>摩<rt>ま</rt></ruby>抈<ruby>ま<rt>き</rt></ruby>）
32. Pāṇḍarā	パーンダラー（白衣）
33. Tārā	ターラー（多<ruby>羅<rt>たら</rt></ruby>）
34. Vajrāṅkuśa	金剛鉤（こんごうこう）
35. Vajrapāśa	金剛索（こんごうさく）
36. Vajrasphoṭa	金剛鏁（こんごうさ）
37. Vajrāveśa	金剛鈴（こんごうれい）
38. Adhimukticaryā	信解行地（しんげぎょうじ）
39. Pramuditā	歓喜地（かんぎじ）
40. Vimalā	離垢地（りくじ）
41. Prabhākarī	発光地（ほっこうじ）
42. Arciṣmatī	焔慧地（えんねじ）
43. Sudurjayā	難勝地（なんしょうじ）
44. Abhimukhī	現前地（げんぜんじ）
45. Dūraṅgamā	遠行地（おんぎょうじ）
46. Acalā	不動地（ふどうじ）
47. Sādhumatī	善慧地（ぜんえじ）
48. Dharmameghā	法雲地（ほううんじ）
49. Samantaprabhā	善光地（ぜんこうじ）
50. Ratnapadmapāramitā	宝蓮華波羅蜜（ほうれんげはらみつ）
51. Dānapāramitā	布施波羅蜜

52. Śīlapāramitā　持戒波羅蜜
53. Kṣāntipāramitā　忍辱波羅蜜（にんにくはらみつ）
54. Vīryapāramitā　精進波羅蜜
55. Dhyānapāramitā　禅定波羅蜜
56. Prajñāpāramitā　般若波羅蜜
57. Upāyapāramitā　方便波羅蜜
58. Praṇidhānapāramitā　願波羅蜜
59. Balapāramitā　力波羅蜜
60. Jñānapāramitā　智波羅蜜
61. Vajrakarmapāramitā　金剛業波羅蜜
62. Āyurvaśitā　命自在（みょうはらみつ）
63. Cittavaśitā　心自在
64. Pariṣkāravaśitā　財自在
65. Karmavaśitā　業自在
66. Upapattivaśitā　生自在
67. Ṛddhivaśitā　神通自在
68. Adhimuktivaśitā　勝解自在
69. Praṇidhānavaśitā　願自在
70. Jñānavaśitā　智自在
71. Dharmavaśitā　法自在
72. Tathatā　如是女（にょぜにょ）
73. Buddhabodhi　仏菩提女（ぶつぼだいにょ）
74. Vasumatī　ヴァスマティー
75. Ratnolkā　ラトノールカー
76. Uṣṇīṣavijayā　仏頂尊勝（ぶっちょうそんしょう）
77. Mārīcī　摩利支（まりしてん）
78. Parṇaśabarī　葉衣（ようえ）
79. Jāngulī　ジャーングリー（常翟利）
80. Anantamukhā　無量門
81. Cundā　準胝（じゅんてい）
82. Prajñāvardhanī　智慧増長（ちえぞうちょう）
83. Sarvakarmāvaraṇaviśodhanī　除一切業障
84. Akṣayajñānakaraṇḍā　無尽智箧
85. Sarvabuddhadharmakośavatī　持一切仏庫（じいっさいぶっこ）
86. Dharmapratisaṃvit　法無礙（ほうむげ）
87. Arthapratisaṃvit　義無礙（ぎむげ）
88. Niruktipratisaṃvit　詞無礙（しむげ）
89. Pratibhānapratisaṃvit　弁無礙（べんむげ）
90. Lāsyā　喜女（きにょ）
91. Mālā　鬘女（まんにょ）
92. Gītā　歌女（かにょ）
93. Nṛtyā　舞女（ぶにょ）
94. Samantabhadra　普賢（ふげん）
95. Akṣayamati　無尽慧（むじんえ）

96. Kṣitigarbha	地蔵
97. Ākāśagarbha	虚空蔵（こくうぞう）
98. Gaganagañja	虚空庫（こくうこ）
99. Ratnapāṇi	宝手
100. Sāgaramati	海慧
101. Vajragarbha	金剛蔵
102. Avalokiteśvara	観自在
103. Mahāsthāmaprāpta	勢至（せいし）
104. Candraprabha	月光（がっこう）
105. Jālinīprabha	網明
106. Amitaprabha	無量光
107. Pratibhānakūṭa	弁積
108. Sarvaśokatamonirghātamani	除憂闇（じょゆうあん）
109. Sarvanivaraṇaviṣkambhin	除蓋障（じょがいしょう）
110. Yamāntaka	ヤマーンタカ（閻曼徳迦）
111. Prajñāntaka	プラジュニャーンタカ
112. Padmāntaka	パドマーンタカ
113. Vighnāntaka	ヴィグナーンタカ
114. Trailokyavijaya	トライローキヤヴィジャヤ（降三世）
115. Vajrajvālānalārka	ヴァジュラジュヴァーラーナラールカ
116. Herukavajra	ヘールカヴァジュラ
117. Paramāśva	パラマーシュヴァ
118. Uṣṇīṣacakravartin	ウシュニーシャチャクラヴァルティン
119. Sumbharāja	スンバラージャ
120. Puṣpā	華女（けにょ）
121. Dhūpā	香女（こうにょ）
122. Dīpā	燈女（とうにょ）
123. Gandhā	塗香女（ずこうにょ）
124. Vajrarūpā	金剛色女（こんごうしきにょ）
125. Vajraśabdā	金剛声女（こんごうしょうにょ）
126. Vajrarasā	金剛味女（こんごうみにょ）
127. Vajrasparśā	金剛触女（こんごうそくにょ）
128. Indra	帝釈天（たいしゃくてん）
129. Yama	焔摩（えんま）
130. Varuṇa	水天
131. Kubera	多聞天（たもんてん）
132. Īśāna	伊舎那天（いしゃなてん）
133. Agni	火天
134. Nairṛti	羅刹天（らせつてん）
135. Vāyu	風天
136. Brahman	梵天（ぼんてん）
137. Viṣṇu	毘紐（びちゅう）
138. Maheśvara（＝Śiva）	マヘーシュヴァラ（＝シヴァ）
139. Kārttikeya（＝Kumāra）	カールティケーヤ（＝クマーラ）

140. Brahmāṇī	ブラフマーニー
141. Rudrāṇī	ルドラーニー
142. Vaiṣṇavī	ヴァイシュナヴィー
143. Kaumārī	カウマーリー
144. Indrāṇī	インドラーニー
145. Vārāhī	ヴァーラーヒー
146. Cāmuṇḍā	チャームンダー
147. Bhṛṅgī	ブリンギー
148. Gaṇapati	ガナパティ
149. Mahākāla	マハーカーラ
150. Nandikeśvara	ナンディケーシュヴァラ
151. Āditya	日天
152. Candra	月天
153. Maṅgala	火星
154. Budha	水星
155. Bṛhaspati	木星
156. Śukra	金星
157. Śanaiścara	土星
158. Rāhu	ラーフ
159. Ketu	ケートゥ
160. Balabhadra	バラバドラ
161. Jayakara	ジャヤカラ
162. Madhukara	マドゥカラ
163. Vasanta	ヴァサンタ
164. Ananta	アナンタ
165. Vāsuki	ヴァースキ
166. Takṣaka	タクシャカ
167. Karkoṭaka	カルコータカ
168. Padma	パドマ
169. Mahāpadma	マハーパドマ
170. Śankhapāla	シャンカパーラ
171. Kulika	クリカ
172. Vemacitrin	ヴェーマチトリン
173. Balin	バリン
174. Plahlāda	プラフラーダ
175. Vairocana	ヴァイローチャナ
176. Garuḍendra	ガルデーンドラ
177. Drumakinnararājendra	ドゥルマキンナララージェーンドラ
178. Pañcaśikha	パンチャシカ
179. Sarvārthasiddha	サルヴァールタシッダ
180. Pūrṇabhadra	プールナバドラ
181. Māṇibhadra	マーニバドラ
182. Dhanada	ダナダ
183. Vaiśravaṇa	ヴァイシュラヴァナ

184. Civikuṇḍalin	チヴィクンダリン
185. Kelimālin	ケーリマーリン
186. Sukhendra	スケーンドラ
187. Calendra	チャレーンドラ
188. Hārītī	ハーリーティー（鬼子母神）
189. Aśvinī	婁宿（ろうしゅく）
190. Bharaṇī	胃宿（いしゅく）
191. Kṛttikā	昴宿（ぼうしゅく）
192. Rohiṇī	畢宿（ひつしゅく）
193. Mṛgaśirā	觜宿（ししゅく）
194. Ārdrā	参宿（しんしゅく）
195. Punarvasu	井宿（せいしゅく）
196. Puṣya	鬼宿（きしゅく）
197. Aśleṣā (Āśleṣā)	柳宿（りゅうしゅく）
198. Maghā	星宿（せいしゅく）
199. Pūrvaphālgunī	張宿
200. Uttaraphālgunī	翼宿
201. Hastā	軫宿（しんしゅく）
202. Citrā	角宿
203. Svātī	亢宿（こうしゅく）
204. Viśākhā	氐宿（ていしゅく）
205. Anurādhā	房宿
206. Jyeṣṭhā	心宿
207. Mūlā	尾宿
208. Pūrvāṣāḍhā	箕宿（きしゅく）
209. Uttarāṣāḍhā	斗宿
210. Śravaṇā	女宿（じょしゅく）
211. Dhaniṣṭhā	虚宿（きょしゅく）
212. Śatabhiṣā	危宿
213. Pūrvabhādrapadā	室宿
214. Uttarabhādrapadā	壁宿
215. Revatī	奎宿（けいしゅく）
216. Abhijit	牛宿（ぎゅうしゅく）
217. Vajrāṅkuśa	金剛鉤（こんごうこつ）
218. Vajrapāśa	金剛索（こんごうさく）
219. Vajrasphota	金剛鑠（こんごうさ）
220. Vajrāveśa	金剛鈴（こんごうれい）

3. ハク・バハールの法界マンダラ

ハク・バハールの法界マンダラは，直径 100 cm，金メッキ，銅製である。ネワール暦1118年（西暦1898年）に製作されたという銘がマンダラ盤の「腹」の部分に残っ

ている。

ハク・バハールの法界マンダラの第一重には，中尊である法界語自在文殊（1）の四方に四仏（阿閦10，宝生15，阿弥陀20，不空25）と四妃（阿閦の妃ローチャナー30，宝生の妃マーマキー31，阿弥陀の妃パーンダラー32，不空の妃ターラー33）がいる。阿閦からターラーまでの8尊はそれぞれ中尊の文殊に向かっている。中尊の文殊およびその周囲にいる四仏の図像学的特徴が『完成せるヨーガの環』の「法界マンダラの章」の文殊および四仏の説明におおよそ一致することは他のところですでに述べた（立川 1989: 16–17）。第一重にはこれらの9尊が描かれているのみであるが，『完成せるヨーガの環』に述べられる法界マンダラ（図1）にあっては文殊（1）の周囲の八仏頂（2～9），四仏それぞれの周囲に四人ずついる十六菩薩（11～14，16～19，21～24，26～29）および四門衛としての四摂菩薩（34～37）がいる。後に考察するように，ノ・バハールの法界マンダラでは第一重の四門は描かれているが，このハク・バハールの法界マンダラの第一重では四門は描かれていない。

ハク・バハールのこのマンダラでは『完成せるヨーガの環』の法界マンダラ（図1）の第二重までを第一重として描いていると考えることもできるかもしれない。後にブ・バハールの考察によってこのような想定はほとんど意味を持たないことが明らかとなる。しかし，ハク・バハールのマンダラを三重構造のものと考えない場合には，どのような問題が生ずるかを見ておくことは有益であろう。

もしもハク・バハールが三重構造ではなく四重構造であれば，ハク・バハールのマンダラ（図2-3）のHE2（Hはハク・バハールを，Eは東を意味する。以下Sは南を，Wは西を，Nは北を意味する），HS2, HW2, HN2の比定が困難となる。一方，三重構造であると考えるならば，HE1, HS1, HW1, HN1を四摂菩薩（34～37）と考えることもできる。しかし，この場合には十二地，十二波羅蜜等のいる回廊の外側の四門に四摂菩薩が配置されることになる。これは『完成せるヨーガの環』のマンダラの諸尊の配置と大きく異なることになる。

ともあれ，『完成せるヨーガの環』のマンダラの第二重に対応する部分を見てみよう。この部分では，十二地，十二波羅蜜，十二自在，十二陀羅尼，四門の四無礙（86～89）および四隅の四供養女が描かれている筈である。しかし，各尊の入るべき部屋の数は四つ不足している。十二地，十二波羅蜜等の入るべき部屋が十二あり，四隅それぞれには供養女が入る部屋が二つ必要なのでそれぞれの回廊には十四の部屋があるべきである。しかし，実際には部屋の数は一辺に十三である。したがって，一辺の回廊には十二地と次の十二波羅蜜の第一が配置されていると考えるべきであろう。

すると，四供養女は略されていることになる。

十二地，十二波羅蜜の部屋の並びの外側にある四門は，ハク・バハールのマンダラでは第一重の四門（HE1, HS1, HW1, HN1）であるかのように描かれている（図3参照）。この四門の中の尊像は『完成せるヨーガの環』に従うならば四無礙（86～89）なのであるが，ハク・バハールの HE1, HS1, HW1 および HN1 を四礙と比定するならば，もう一重外側の四門の尊像（HE2, HS2, HW2, HN2）の比定が不可能になる。『完成せるヨーガの環』に述べられた以外の尊格が HE2 等として描かれていると考えることはできない。また HE2 等の四尊のもう一重外側（『完成せるヨーガの環』のマンダラでは第三重，図1）には，パドマーンタカ等の四人の忿怒尊が人形で描かれている。図3に見るように，HE1, HE2 および HE3 は一列に並んでおり，HE2 と HE3 の間に他の尊格が入る空間的余裕はない。同様に HS2 と HS3, HW2 と HW3 および HN2 と HN3 の間にも他の尊格が入ってくる可能性はない。したがって，HE1, HE2 および HE3 が人形で表現されており，しかも一列に並んでいるかぎり，HE2 は四無礙の一人としての法無礙（86）であるというべきであろう。それゆえ，四無礙は『完成せるヨーガの環』の法界マンダラでは第二重に存するが，ハク・バハールのマンダラでは忿怒尊と同じ重すなわち『完成せるヨーガの環』のマンダラの第三重に存することになる。もっとも前に述べたように，ハク・バハールのマンダラでは『完成せるヨーガの環』のマンダラの第一重と第二重を合わせて「第一重」，第三重を「第二重」そして第四重を「第三重」として描いた可能性もなくはない。その場合には，ハク・バハールの四無礙（HE2, HS2, HW2, HN2）は「第二重」に存することになる。しかし，実はこの想定にも無理が存するのである。

『完成せるヨーガの環』のマンダラの第四重に相当する最外輪の部分には，護方神（八方神）（128～135），ヒンドゥー教の神々・九星（九曜（くよう））・八竜王・八夜叉・二十八宿（しゅく）などの神々（136～216）および四門衛としての四摂菩薩（217～220）がいる。『完成せるヨーガの環』の法界マンダラでは，第四重の最外輪に並ぶ神々のある者たち（132～146, 151～153, 157, 160～163）は，牛や孔雀などの乗物に乗っているが，ハク・バハールのマンダラでは乗物に乗る者はおらず，ガナパティ（148）以外はすべて坐っている。『完成せるヨーガの環』およびハク・バハールにおいて最外輪の神々はすべて蓮華の上に坐っている。因みに，ハク・バハールのマンダラでは，最外輪の外には四妃のみが蓮華の上に坐っている。

ハク・バハールの境内にあるこの法界マンダラは，ノ・バハールやブ・バハールのマンダラよりも古いにもかかわらず，刻まれた線はもっとも鮮明である。中尊の文殊，

四仏，四妃，十六菩薩，八供養女，八忿怒尊，護方神およびヒンドゥー教の神々などの図像は図像学的資料として使用価値の高いものである。

4. ノ・バハールの法界マンダラ

ノ・バハールの法界マンダラは，直径 97 cm，真鍮製である。ネワール暦1047年（西暦1926年）に製作されたという銘がある。このマンダラの中で人形の図像で描かれている尊像の数や位置はハク・バハールのものと似ている。ノ・バハールのマンダラはハク・バハールのそれより約30年後に製作されており，またこの二つの寺院は 100 m ほどしか離れていないので，ノ・バハールのマンダラがハク・バハールのそれをモデルにした可能性もある。

ノ・バハールのマンダラは，図4～5に見るように，四重構造を有している。ハク・バハールのマンダラでは見られなかった第一重の門もこのマンダラには存する。ノ・バハールのマンダラの第一重には中央に法界語自在文殊（1）がおり，その四方に四仏（10，15，20，25）が，その四維（中間位）に四仏それぞれの妃（30～33）がいる。第一重の四門を守る四摂菩薩（34～37）は，小さな門のみによって示され，各菩薩の図像は省略されている。

第二重には，十二地（38～49），十二波羅蜜（50～61），十二自在（62～73），十二陀羅尼（74～85），四無礙（86～89）および四供養女（90～93）がいる筈である。しかし，ノ・バハールの場合は第一重の門（NE1, NS1, NW1, NN1）（イニシャルの N はノ・バハールを意味する）が描かれているゆえにそれらには四摂菩薩（34～37）がいることは確実である。ならば，ノ・バハールの第二重の門（NE2, NS2, NW2, NN2）には四無礙（86～89）がいることになる。四無礙は門衛としての職能を有し，それらの図像的表現も門衛としての四摂菩薩（34～37）とよく似ている。もっとも NE2 等の四尊と『完成せるヨーガの環』の法界マンダラの四無礙とは図像学的によく一致するわけではない。ともあれ，ノ・バハールの法界マンダラが『完成せるヨーガの環』の法界マンダラと構成員が同じという前提に立てば，NE2 等の四尊は四無礙と考えざるを得ない。しかし，このように考えるならば，第三重の構成員の比定の際にさらに大きな困難に出会うことになる。

ノ・バハールのマンダラの第二重の比定には別の困難も存する。十二地，十二波羅蜜等の図像はなくて，部屋のみが示されているが，一列十八の部屋が描かれている。両端は供養女の部屋であるとしても，十二地や十二波羅蜜等それぞれに十六の部屋数

は理に合わない。各回廊に四尊ずつを加えたのかとも思われるし，それほど厳密に部屋数を数えなかったのかもしれない。

第三重では，十六菩薩（94～109），十忿怒尊（ダシャ・クローダ）の内の八人の忿怒尊（110～117）および八供養女（120～127）が人形の図像で表現されている。一般的に法界マンダラに登場する尊格の図像が詳細かつ鮮明に描かれるのは第三重においてであるが，スヴァヤンブーナート仏塔の東の法界マンダラを始めとしてここに扱う三つの法界マンダラの場合もこの第三重の諸尊の図像が同一のマンダラの他の重に較べてより詳細かつ鮮明である。

ノ・バハールのマンダラはハク・バハールの場合と同様に，二人の忿怒尊すなわちウシュニーシャチャクラヴァルティン（118）とスンバラージャ（119）は描かれていない。『完成せるヨーガの環』のマンダラでは，忿怒尊 110の外側にマンダラ全体の上方に位置するウシュニーシャチャクラヴァルティン（118）が，忿怒尊112の外側にマンダラ全体の下方に位置するスンバラージャ（119）がいる。しかし，ハク・バハール，ノ・バハール，ブ・バハールの三つのマンダラでは上方の忿怒尊（118）と下方の忿怒尊（119）は描かれていない。このことはネワールの他のマンダラについてもいい得ることであって，十忿怒尊すべてが描かれることはネワールのマンダラではほとんどない。

問題は第三重の四方の四門（NE4, NS4, NW4, NN4）には部屋のみが示されており，その中に忿怒尊のすがたが描かれていないことだ。四維には忿怒尊のすがたが人形の図像によって表現されている。

さらに困難な問題は，今述べた第三重の四門のそれぞれの内側の四尊（NE3, NS3, NW3, NN3）の比定がほとんど不可能なことだ。ハク・バハールのマンダラの場合には，いささか強引に NE3 等に相応する HE2 等を四無礙と考える可能性もなかったわけではない。しかし，NE2 は明らかに四摂菩薩の一人であり，NE3 を四無礙の一人とするわけにはいかない。マンダラの配置図から考えるならば，NE3 等を忿怒尊の柔和なすがたと想定することも可能かもしれない。というのは，NE3 等のすぐ外側の NE4 等は部屋のみが示されているからだ。NE4 等には部屋のみが示されており，その住人はその内側の NE3 等に示されていると考えるのである。しかし，NE3 等の図像は明らかに忿怒尊のそれではない。さらに，次の節のブ・バハールのマンダラの考察の際に見るように，NE4 等にあたる位置（BE4 等，B はブ・バハールを意味する）には人形の図像が描かれているのである。このように考えてくると，HE2, NE3, BE3 は一体誰なのかという疑問があらためて生じてくるのである。

第四重には，護方神（八方神）（128～135），ヒンドゥー教の神々・九星（九曜）・八竜王・八夜叉・二十八宿などの神々（136～216）および四門衛としての四摂菩薩（217～220）がいる。このマンダラにおける護方神八尊の内，四維における四尊（132～135）の表現方法と四方における四尊（128～131）のそれとは異なっている。前者の四尊は左右の尊格とは際立って異なるすがたをしているが，後者の四尊は左右の尊格とほとんど同じ描き方であるが，この形式はハク・バハールのマンダラと同様である。このように，ノ・バハールのマンダラはハク・バハールそのものあるいはハク・バハールのマンダラの伝統に従っているといえよう。

5. ブ・バハールの法界マンダラ

ハク・バハールのある通りを挟んではす向かいにブ・バハールがある。ブ・バハール本堂から数メートルの位置に大きな銅製の法界マンダラ（図6～7）がある。このマンダラの諸尊の図像や位置は特にノ・バハールのものと似ているように思われる。この寺院の境内に住む人々によれば，現在のマンダラは二十数年前に新しく作られたものであり，それまでの古いマンダラは新しいマンダラの下に残っているとのことであった。古いマンダラの製作年に関しては1945年の銘が残っているが，新しいものの製作年ははっきりしない。

ブ・バハールのマンダラの古いものがどのような図像を有していたかを知ることはできないが，新しいマンダラの製作にあたっては古いマンダラおよびハク・バハールやノ・バハールのマンダラも参考にしたと思われる。ブ・バハールの古いものもハク・バハールやノ・バハールのマンダラより新しいのである。

ブ・バハールのマンダラは四重構造であり，第一重の構成はノ・バハールのマンダラによく似ている。中尊の文殊（1）の周囲に四仏（10，15，20，25）と四妃（30～33）がおり，第一重の四門（BE1, BS1, BW1, BN1, 図90～92参照）は小さく部屋のみで示されている。第二重は一辺十三の部屋のある四角い回廊が描かれている。これはハク・バハールの場合と同様である。おそらく，十二地，十二波羅蜜等のための部屋を描いたのであり，四供養女（90～93）は省略されたのである。第二重の門（BE2, BS2, BW2, BN2）それぞれに人形の図像がある。それらは四無礙（86～89）と思われる。それらの図像学的特徴は『完成せるヨーガの環』の規定と部分的には一致する。法無礙（86）は鉤を持つが，それに対応すると思われる BE2 も鉤を持つ。義無礙（87）は索を持つが BS2 も索を持つ。詞無礙（88）は鑁を持つが BW2 が鑁を持

つか否かは定かではない。弁無礙（89）は鈴を持つが BN2 は三叉戟を持っている。位置から判断して，BE2, BS2, BW2, BN2 の四尊は四無礙と思われるが，『完成せるヨーガの環』の規定と一致するとはいい難い。おそらくこのブ・バハールのマンダラの製作の段階では『完成せるヨーガの環』に代表されるインド的規定からさまざまな側面において離れるようになっており，この四無礙の表現もその一例と思われる。

第三重では，十六菩薩，八供養女，十忿怒尊から二人を除いた八人の忿怒尊が描かれている。第三重の門それぞれに八人の忿怒尊がすべて人形の図像で描かれていることは，ハク・バハールと同様である。ハク・バハールのマンダラでは第一重の四摂菩薩が省略されていたが，ブ・バハールの場合は第一重の四摂菩薩の部屋は示されている。そして，ブ・バハールのマンダラでは第二重の門（B2）および第三重の門（B4）にも人形の図像がある。では，第二重の門と第三重の門の間の人形の図像（B3）は一体誰を表現しているのであろうか。ネワール仏教徒は『完成せるヨーガの環』に述べられた規定あるいはそれと同じシステムを法界マンダラの規定として守ってきた。しかし，『完成せるヨーガの環』の規定からは，B3 の四尊（BE3, BS3, BW3, BN3）を比定することはできない。

第三重の門の内側の四尊（H2 の四尊，N3 の四尊，B3 の四尊）を四無礙とすることはできない。一方，それらの四尊のすぐ外側には忿怒尊あるいはその部屋が描かれていた。では H2 等の四尊は誰かという問が，ハク，ノおよびブの三寺院のマンダラに関して問題となったのである。

この問題の解決のヒントは，スヴァヤンブーナート仏塔の東の法界マンダラにあると思われる。このマンダラでは，第三重の門に忿怒尊が描かれるのは東門のウシュニーシャチャクラヴァルティン（118）と西門のスンバラージャ（119）の二人のみであり，他の八人は回廊に描かれている。例えば，（立川 1989: 36）の写真19に見られるように，ウシュニーシャクチャクラヴァルティンは第三重の東門の中（写真19上）に，忿怒尊ヤマーンタカ（110）がその内側（写真19下）にいる。つまり，忿怒尊が十六菩薩や八供養女と同じ列に並んでいるのである。であるならば，HE2 等の四尊，NE3 等の四尊，BE3 等の四尊は元来，忿怒尊であった可能性がある。スヴァヤンブーナートのマンダラにあっては第三重の南門と北門の中には忿怒尊のすがたは描かれておらず，南方を守るパドマーンタカ（111）と北方を守るヴィグナーンタカ（113）とが回廊の中に十六菩薩と並んで描かれている。忿怒尊は護方神つまり方角を護る尊格なのであり，門衛ではない。

ハク，ブの二寺院のマンダラは，四方の忿怒尊を十六菩薩と同列に描きながら，な

おその上に四方の門の中に忿怒尊を描いてしまったのだと推測される。ノ・バハールのマンダラでは，第三重の門（N4）には何も描かれていない。したがって，ノ・バハールのマンダラの製作者たちはわれわれが扱ってきた問題に気づいたために，門の中に図像を刻まなかったのかもしれない。

ただ第三重の東門（HE3, NE4, BE4）と西門（HW3, NW4, BN4）に描かれている忿怒尊が，ウシュニーシャチャクラヴァルティンとスンバラージャでないとは正しいのかという疑問が残る。しかし，現在残っている図像から推察するかぎりでは，その二尊ではないだろうと思われる。一方，ここで扱った三つのマンダラにおける八忿怒尊の図像が『完成せるヨーガの環』の規定とすべて一致しているわけでもない。

第三重の門の内側に並ぶ問題の四尊（H2 の四尊，N3 の四尊，B3 の四尊）は菩薩形を採っており，三つのマンダラでは互いに類似したすがたで描かれている。したがって，この四尊に関する何らかの共通の理解があったと思われる。しかし，その菩薩形の四尊がはたして真に忿怒尊の図像であるか否かは改めて吟味される必要がある。ともあれこれらの三つのマンダラに残された図像を尊格別に整理していくことが現時点では重要であろう。

付　　記

本稿で用いた写真の内，図56～96は写真家横田憲治氏の撮影したものである。ここに使用する許可をいただいたことに厚く御礼申し上げたい。なお図1～55の写真は立川の撮影したものである。また図2，4，6は高岡秀鴨氏（仏教資料文庫，名古屋）作製の拓本を使用させていただいた。ここに記して謝意を表したい。カトマンドゥ在住の Gauntam Ratna Bajracharyya 氏にはネワール語の銘文読解などで助力を得た。厚く御礼申し上げる次第である。

本稿は平成8～10年度に行なわれた国立民族学博物館の共同研究「聖性と世界との関係に関する研究」（代表者，立川）の成果の一部である。

注

1）カトマンドゥ盆地の寺院総覧（Pruscha 1975）では A/P-39 と番号づけられている。この寺院の名称は Haka Bahal あるいは Hakha Bahal と綴られるが，その発音は「ハク・バハール」が近い。パタン市における代表的仏教寺院のひとつである。（Pruscha 1975: 139）参照。

2）（Pruscha 1975）では C/P-52 と番号づけられている。この寺院の名称は Na Bahal あるいは Naḥ Bahal と綴られるが，その発音は「ノ・バハール」が近い。（Pruscha 1975: 140）参照。

3）（Pruscha 1975: 141）では B/P-44 Bu Bahal と呼ばれている。

4)　(立川 1989: 16) ではこのマンダラが「チベット人の手になる」と書いた。たしかにこのマンダラにはチベット文字の真言が彫りこまれているが，ネワール人の手になるものである。スヴァヤンブーナート寺院で会ったネワール人より「このマンダラはもともとカトマンドゥ旧王宮の南にあるビール病院の敷地にあったものがスヴァヤンブーナート寺院の境内に移された」と聞いた (1992年2月)。この石製マンダラが乗る台は (立川 1989: 23) に見られるようにレンガ作りの粗末なものであり，台は最近作られたものであることがわかる。

5)　ハク，ノ，ブの三寺院のマンダラのレプリカ標本番号はそれぞれ MI 1756, MI 1754, MI 1755 である。

文　　献

長野泰彦・立川武蔵　編
1989 『法界語自在マンダラの神々』(国立民族学博物館研究報告　別冊7号)。

Pruscha, Carl
1975 *Kathmandu Valley, the preservation of physical environment and cultural heritage, a protective inventry*, Vol. 2. Vienna: Anton Schroll & Co. Publisher.

立川武蔵
1989 「カトマンドゥにおける法界マンダラ」『国立民族学博物館研究報告別冊7号』pp. 5–44。

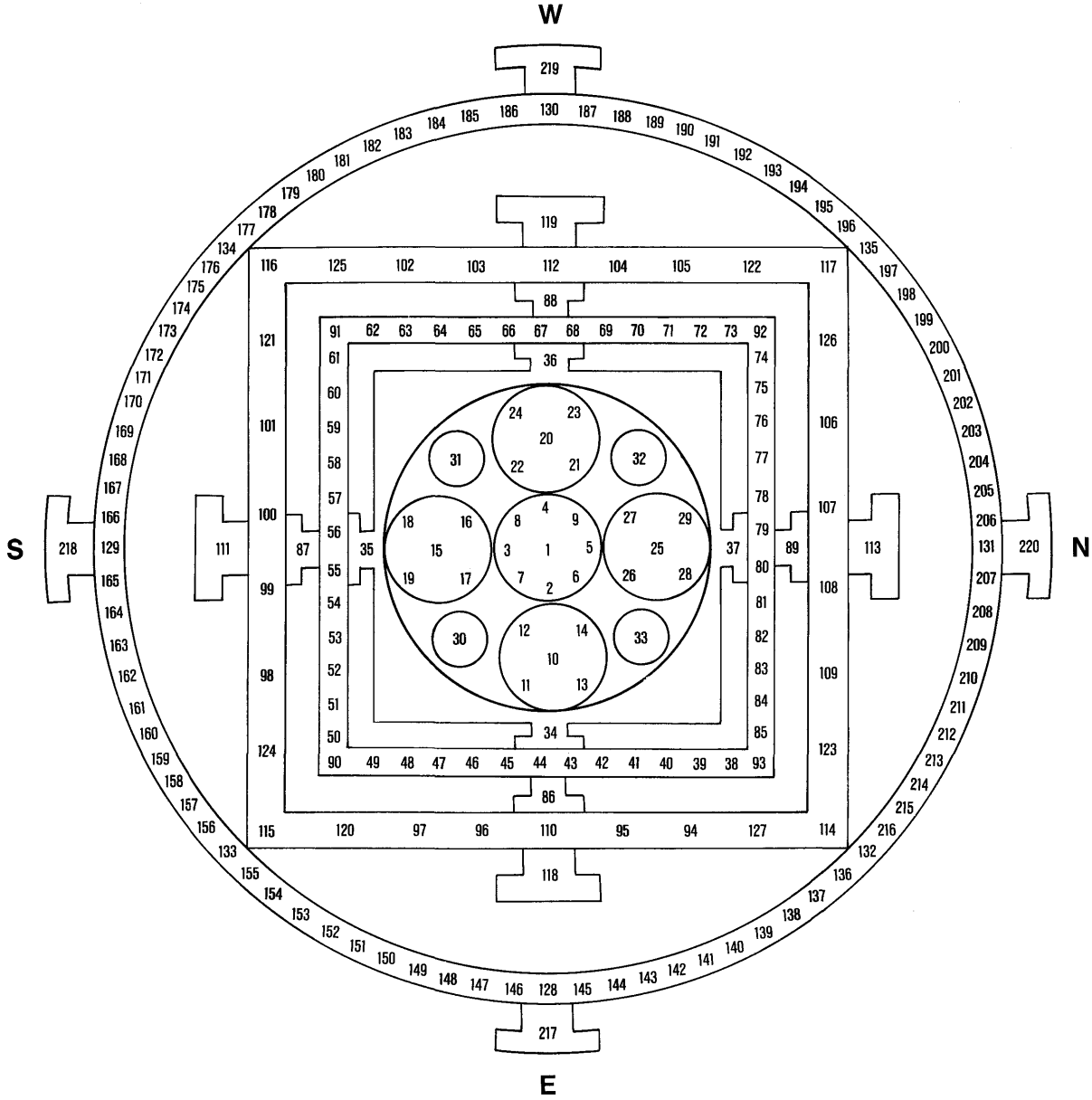

図1　法界マンダラ Dharmadhātu Maṇḍala 諸尊配置

a)『完成せるヨーガの環』第21章「法界マンダラの章」の配置に従う。(長野・立川 1989: 47) にある図1の配置と同一である。

b) スヴァヤンブーナート仏塔東の法界マンダラの諸尊の場合と同一の配置である。

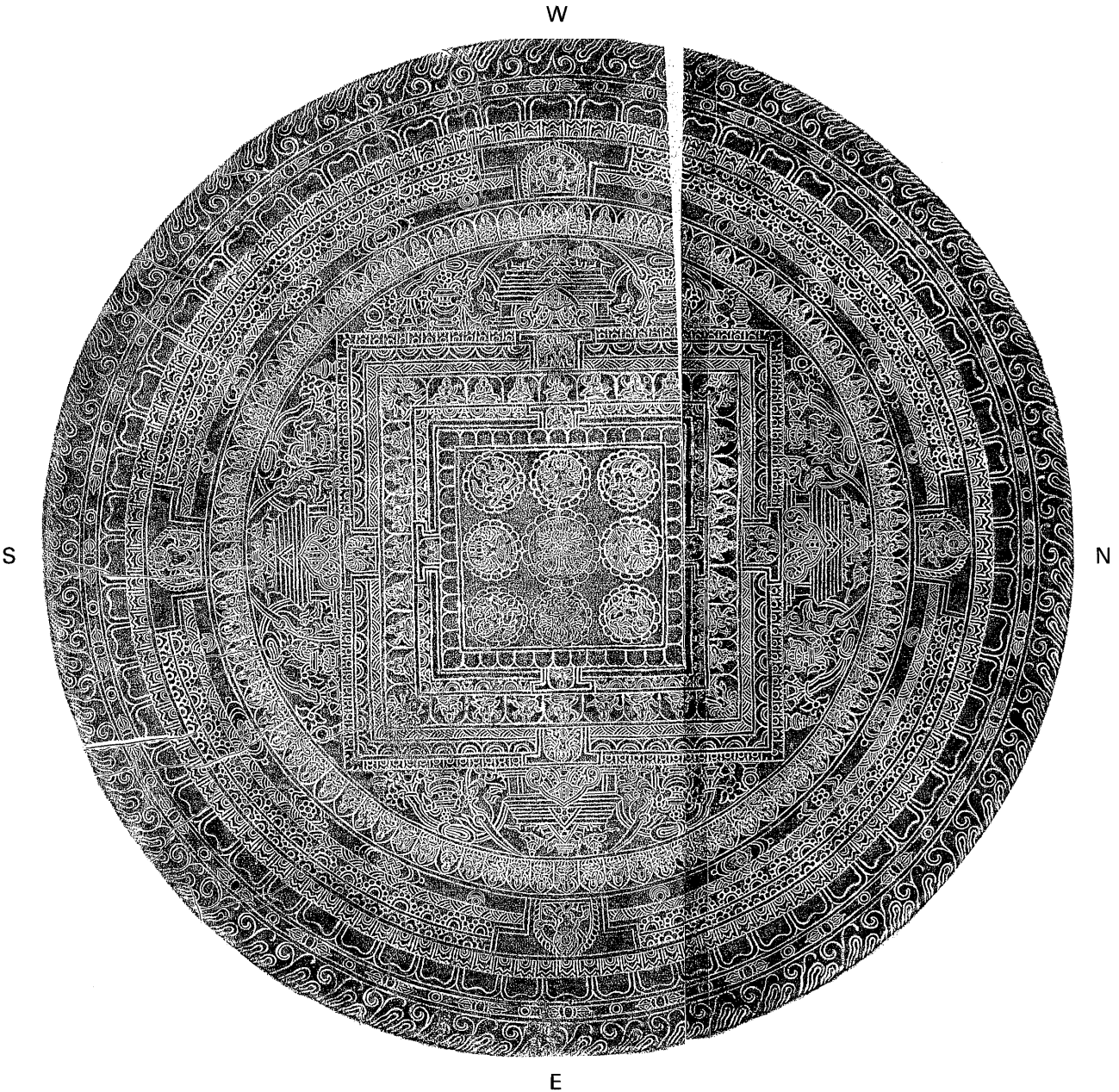

図 2　ハク・バハール Haka Bahal の法界マンダラ Dharmadhātu Maṇḍala
ハク・バハールの法界マンダラ抜本（縮少）マンダラ銅盤が凸状であるゆえに右上部の切れがある。

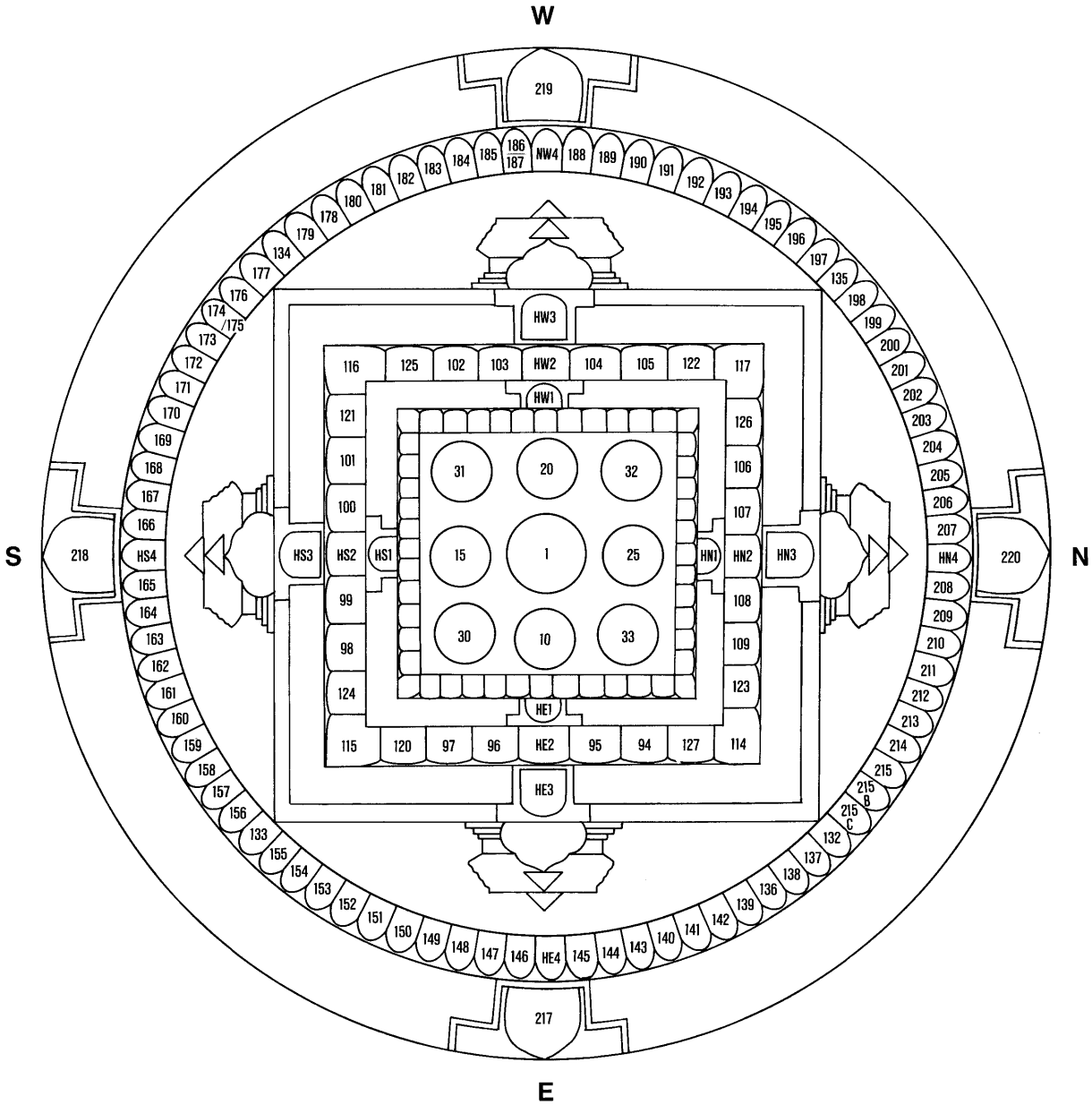

図 3　ハク・バハール Haka Bahal の法界マンダラ Dharmadhātu Maṇḍla 諸尊配置

a）137の尊像は円盤（チャクラ）を持つのでヴィシュヌ，138は三叉戟を持つのでシヴァ，139は三叉の宝を持つので，クマーラと思われる。136の尊像はブラフマンであろう。

b）140～146は七母神である。142は円盤を持つのでヴィシュヌの妃ヴァイシュナヴィー，141は三叉戟を持つのでシヴァ（ルドラ）の妃ルドラーニー，143は三叉の宝を持つのでクマーラのパートナーであるカウマーリーである。140の尊像はブラフマンの妃ブラフマーニーであろう。

c）172～175の 4 尊は『完成せるヨーガの環』によれば同じすがたであるが，ここでは同じすがたのものは 3 尊しかない。176はガルダ鳥であり，172～175と図像的に同じではあり得ない。したがって，172～175の内の 1 尊が省略されていると思われる。

d）177と178はヴィーナー楽器を持つ。178の位置は図 1 の場合と異なって179の次となっている。

e）180～187は八竜王であるが，ここでは 7 人の竜王しかいない。

f）189～215は二十八宿の内の27のみを示す。

g）215B および 215C の名称は不明である。

h）HE1～4, HS1～4, HW1～4, HN1～4 に関しては本文参照。おそらく HE1, HS1, HW1, HN1 は四無礙（86～89）であろう。

図4　ノ・バハール Na Bahal の法界マンダラ Dharmadhātu Maṇḍala

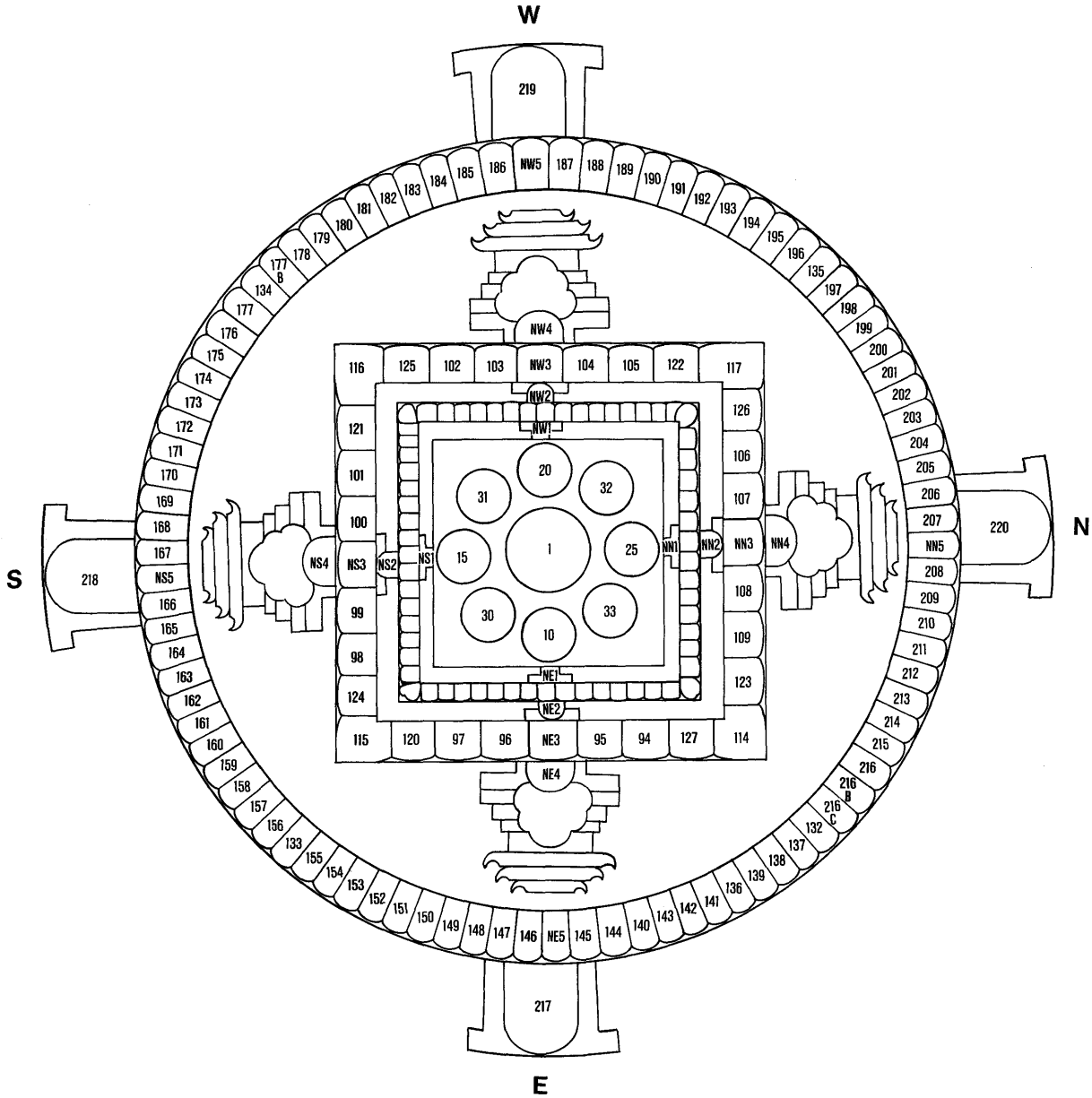

図 5　ノ・バハール Na Bahal の法界マンダラ Dharmadhātu Maṇḍala 諸尊配置

a）136～139のヒンドゥー主要神および140～146の七母神の順序は図 1 よりも図 3 に近い。
b）177B の尊像の名称は不明である。
c）216B, 216C は図 3（ハク・バハール）215B, 215C と同様に二十宿の後に配置されているが，この二尊の名称は不明である。
d）NE1, NS1, NW1, NN1 の四尊は第一重の四門衛（34～37）である。
e）NE2, NS2, NW2, NN2 の四尊は四無礙（86～89）である。

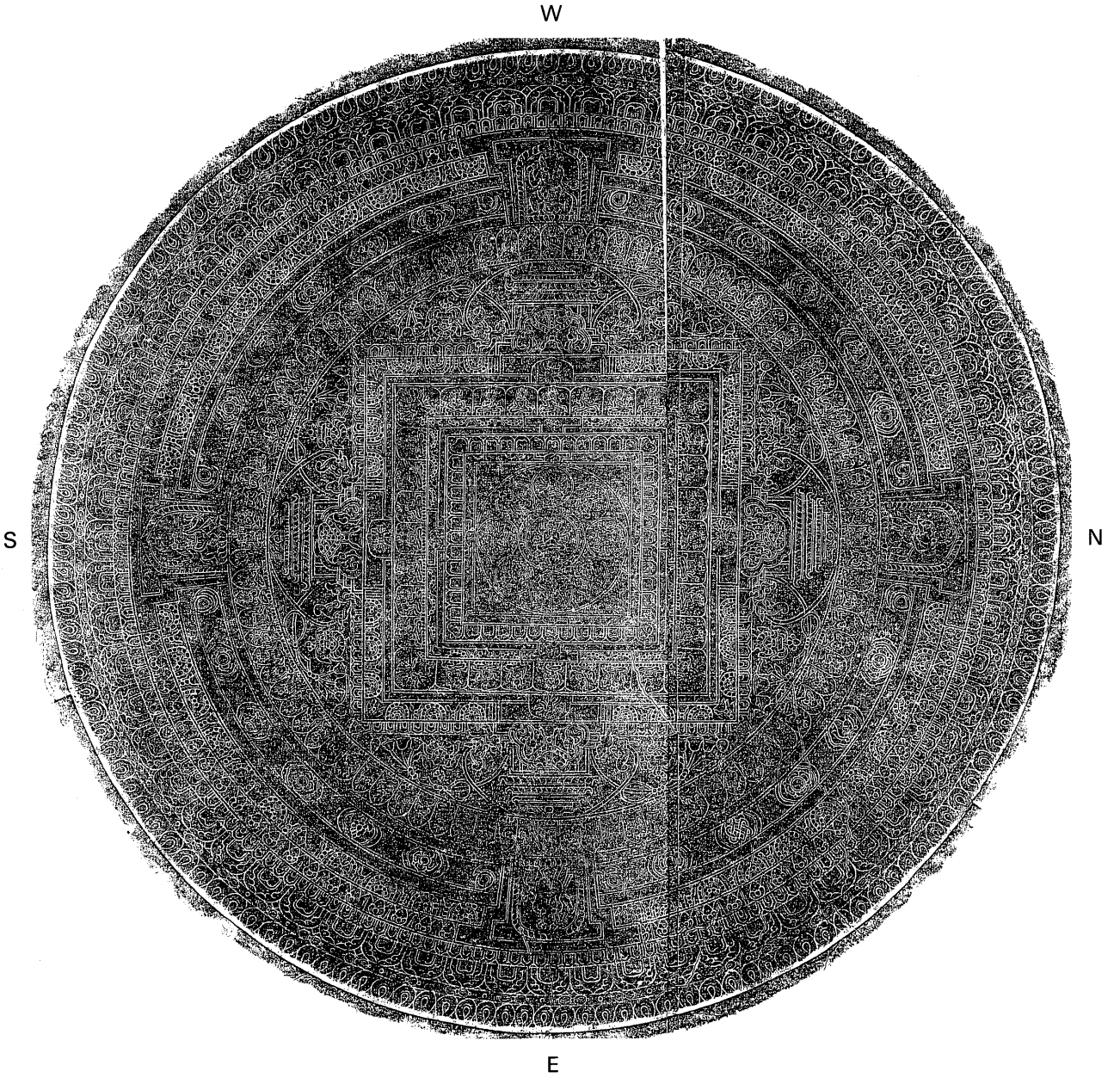

図6　ブ・バハール Bu Bahal の法界マンダラ Dharmadhātu Maṇḍala

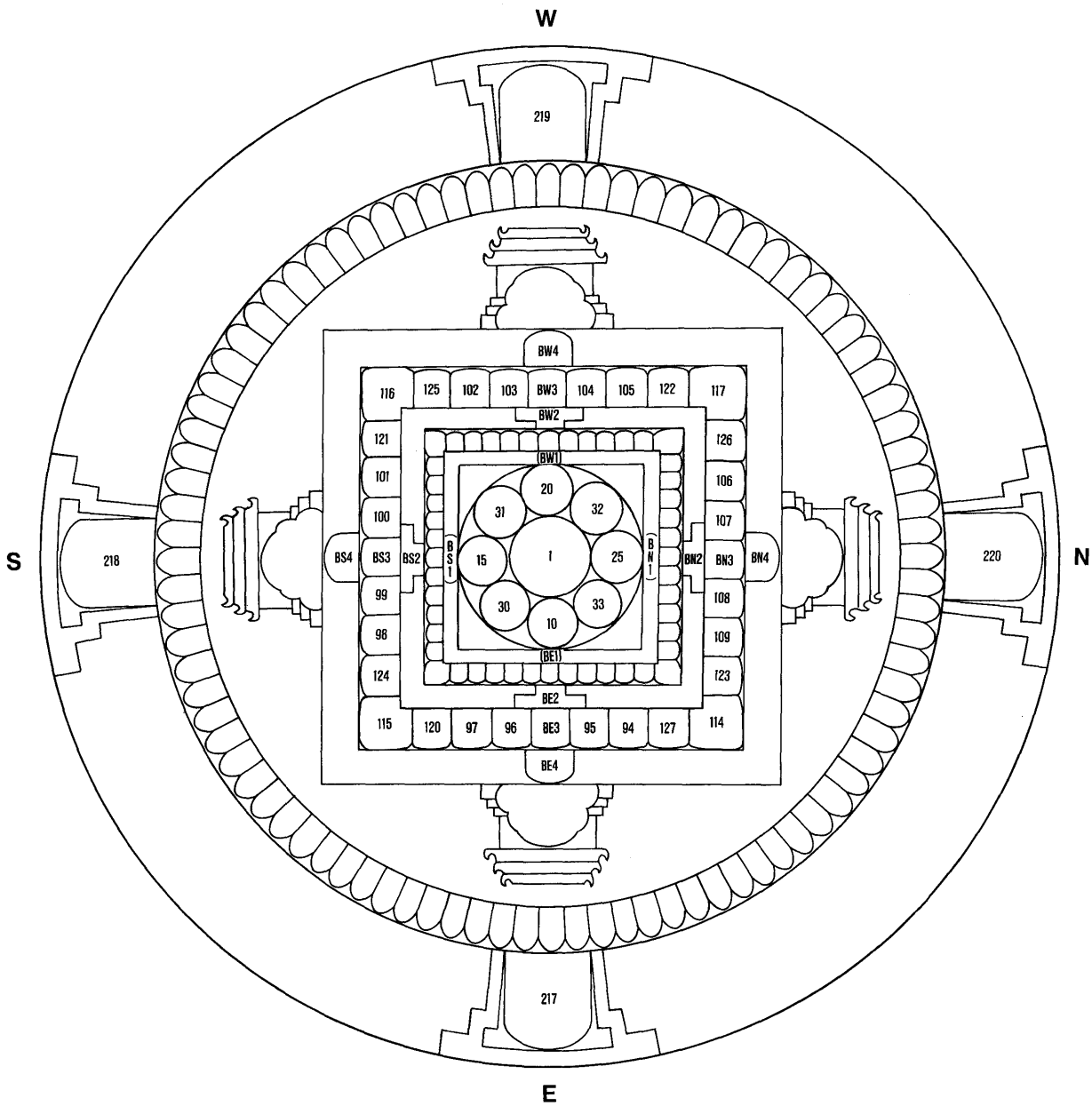

図7　ブ・バハール Bu Bahal の法界マンダラ Dharmadhātu Maṇḍala 諸尊配置
a）BE1, BS1, BW1, BN1 の四尊は四門衛（34～37）である。
b）BE2, BS2, BW2, BN2 の四尊は四無礙である。
c）第四重の最外輪の図像（128～220）は不鮮明であるゆえに，この図では番号を省略した。

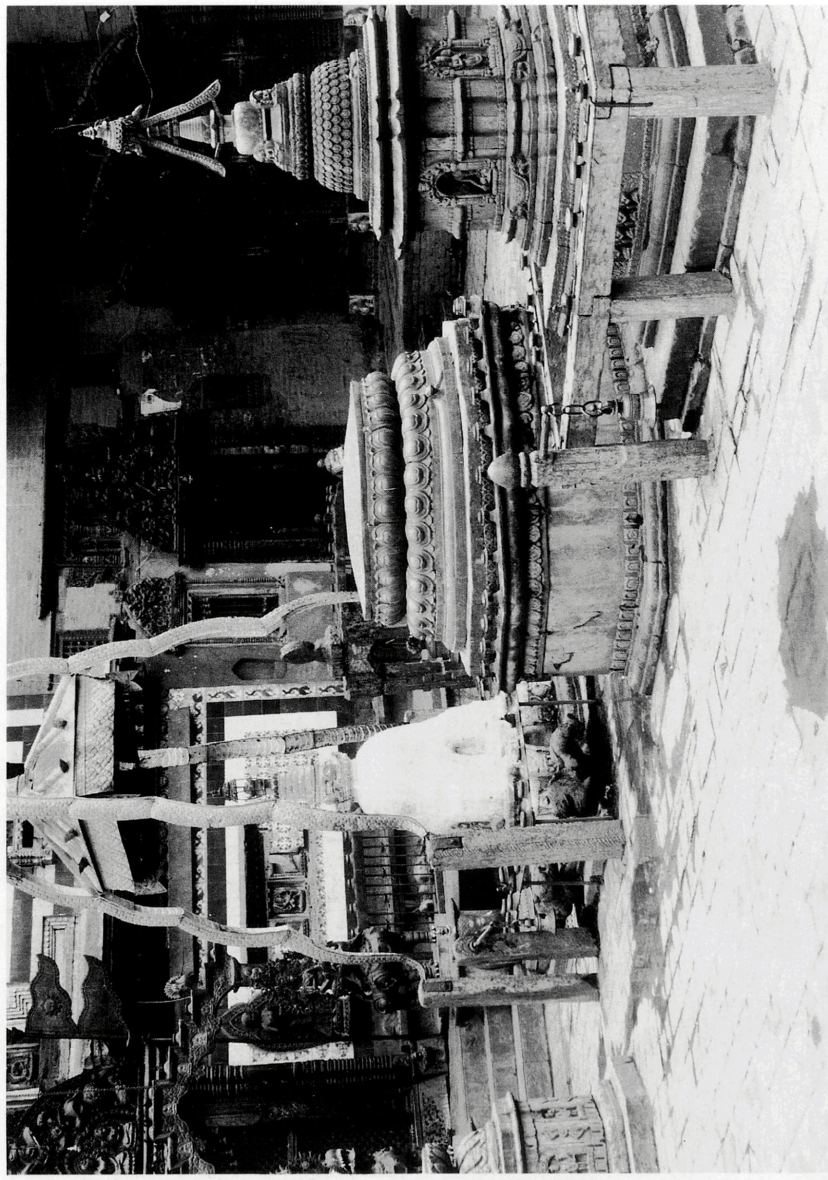

図8　ハク・バハール Haka Bahal 境内の法界マンダラ

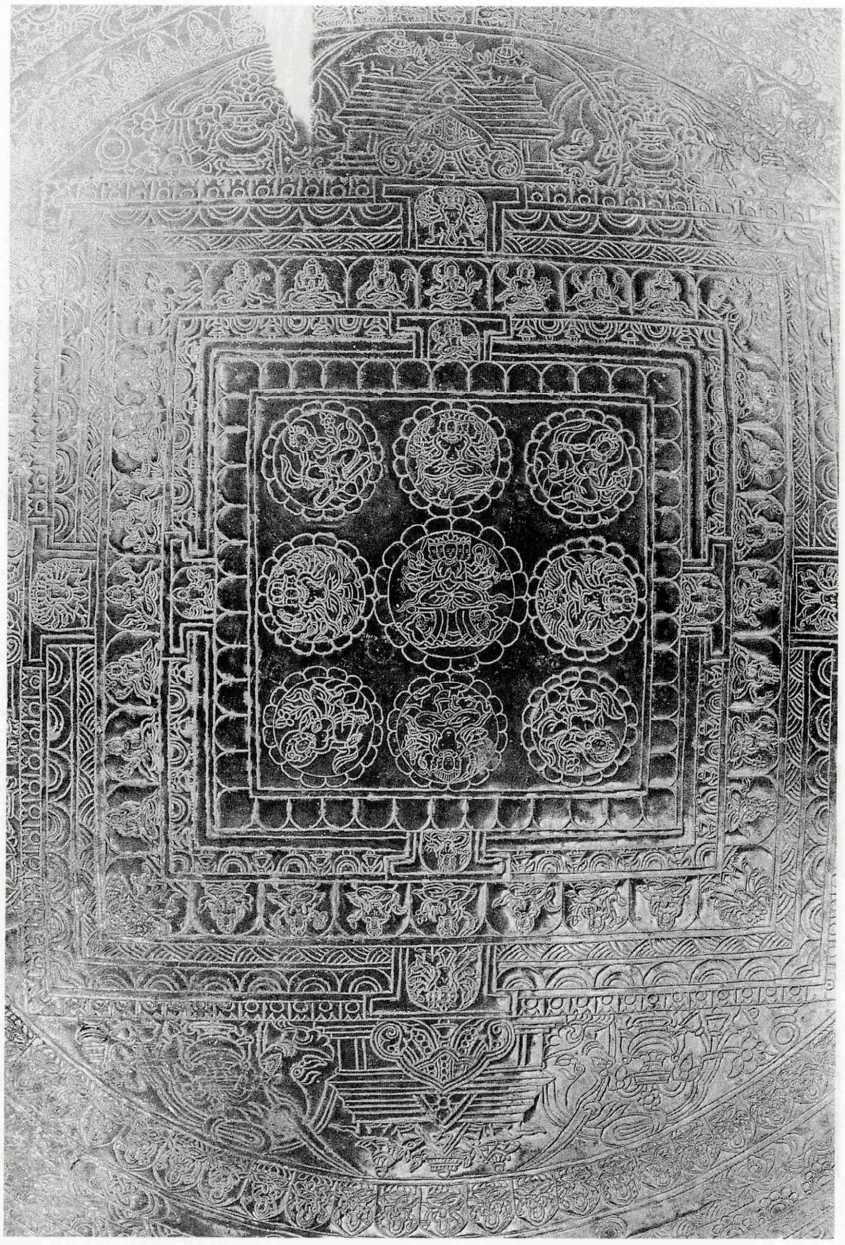

図9　ハク・バハール・マンダラ **Haka Bahal Maṇḍala**
（写真下部が東）

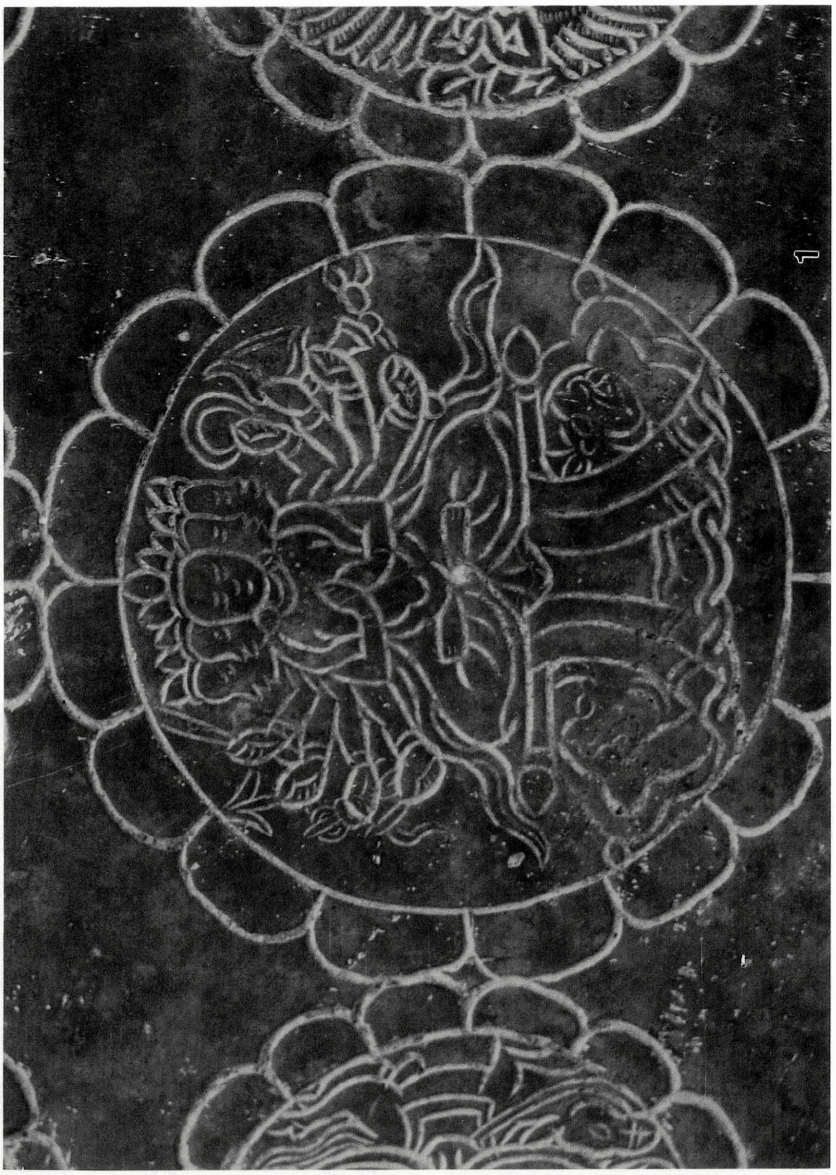

図10 ハク・バハール・マンダラ Haka Bahal Maṇḍala

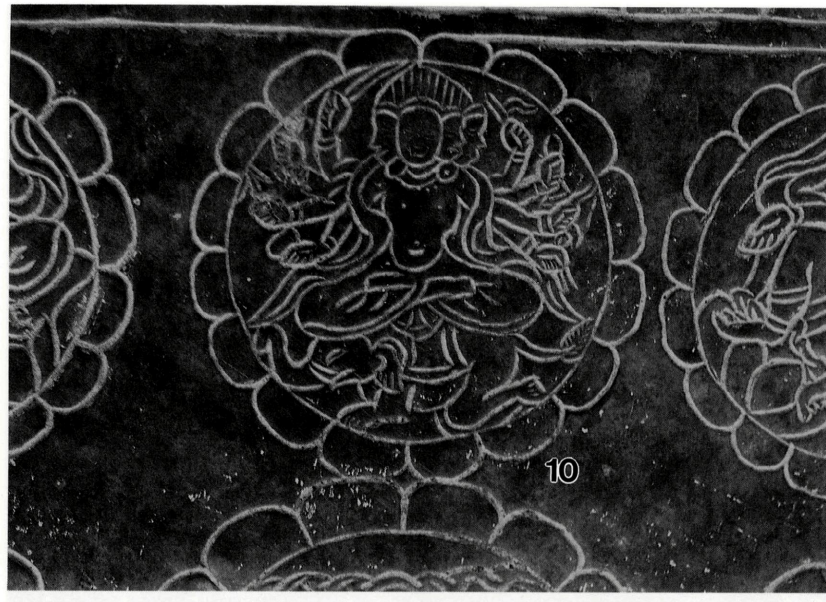

図11　ハク・バハール・マンダラ Haka Bahal Maṇḍala

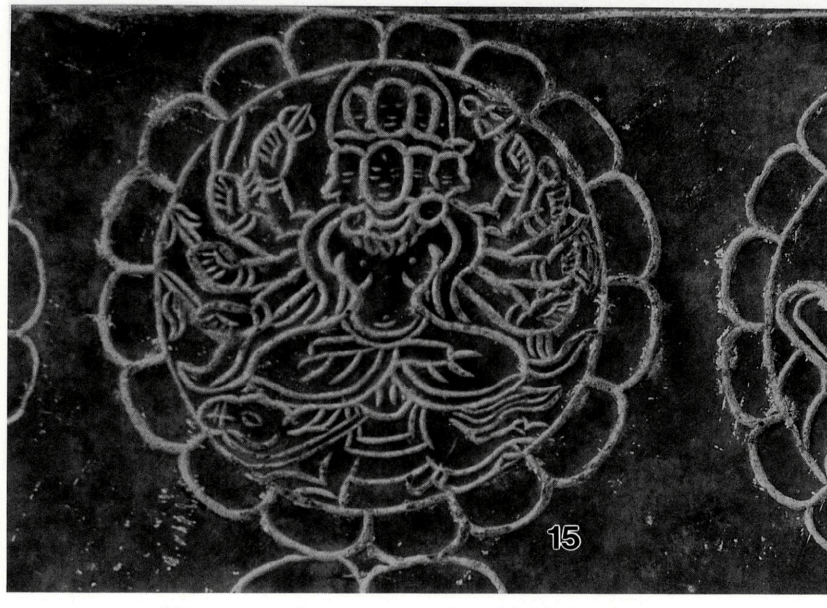

図12　ハク・バハール・マンダラ Haka Bahal Maṇḍala

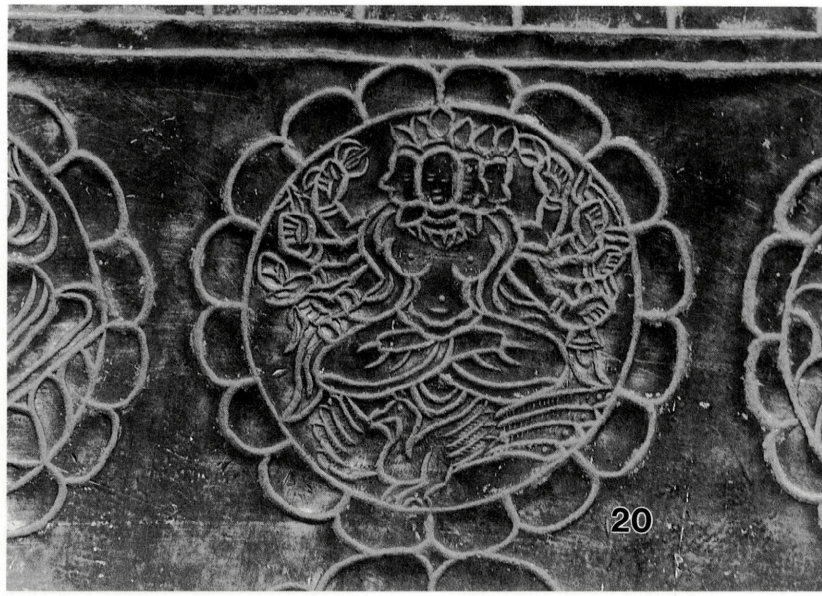

図13　ハク・バハール・マンダラ Haka Bahal Maṇḍala

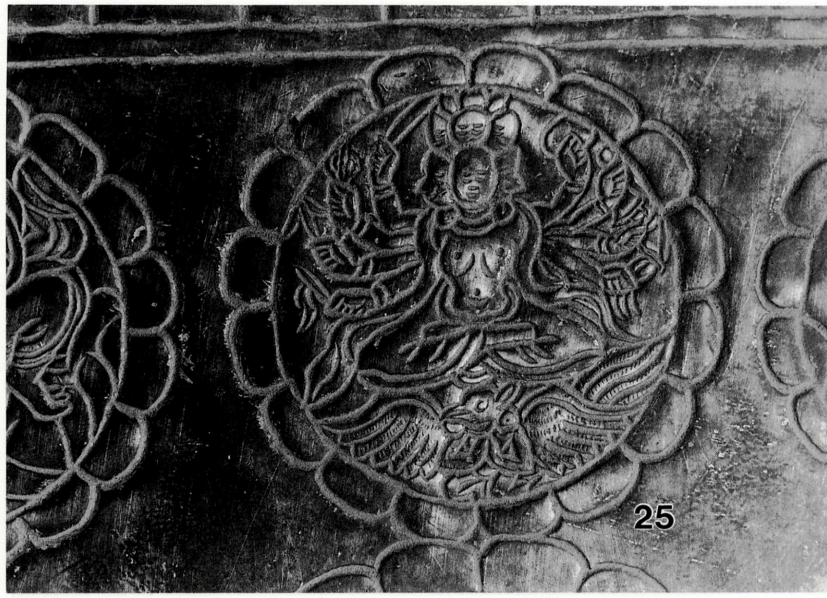

図14　ハク・バハール・マンダラ Haka Bahal Maṇḍala

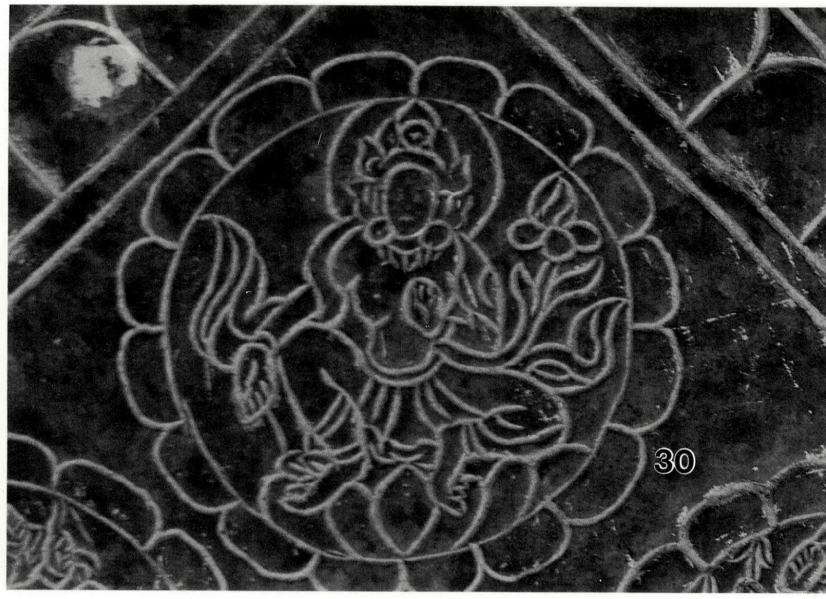

図15　ハク・バハール・マンダラ Haka Bahal Maṇḍala

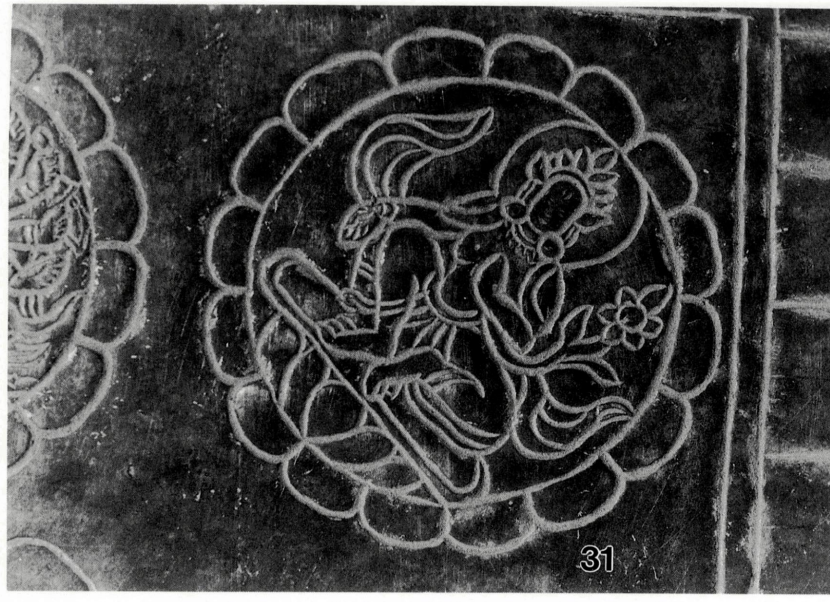

図16　ハク・バハール・マンダラ Haka Bahal Maṇḍala

図17　ハク・バハール・マンダラ Haka Bahal Maṇḍala

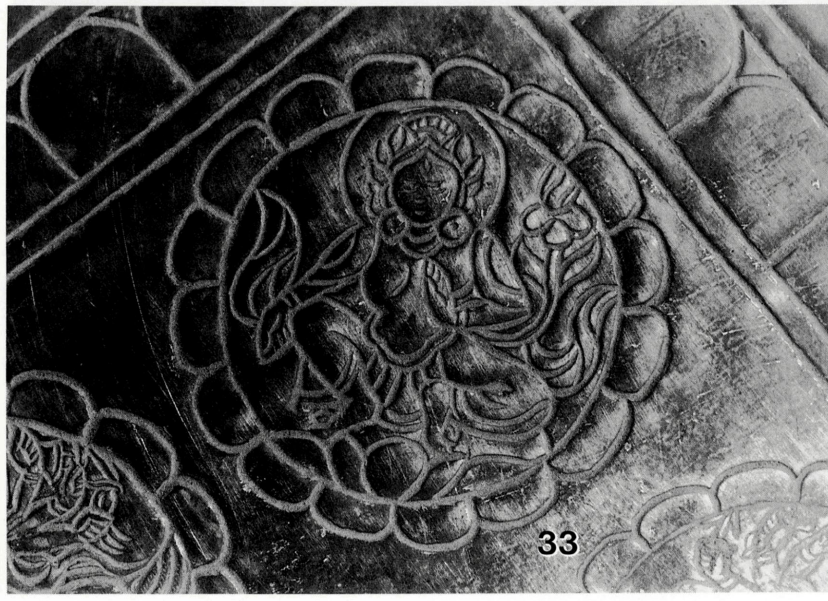

図18　ハク・バハール・マンダラ Haka Bahal Maṇḍala

図19　ハク・バハール・マンダラ Haka Bahal Maṇḍala

図20　ハク・バハール・マンダラ Haka Bahal Maṇḍala

図21　ハク・バハール・マンダラ Haka Bahal Maṇḍala

図22　ハク・バハール・マンダラ Haka Bahal Maṇḍala

図23　ハク・バハール・マンダラ Haka Bahal Maṇḍala

図24　ハク・バハール・マンダラ Haka Bahal Maṇḍala

図25　ハク・バハール・マンダラ Haka Bahal Maṇḍala

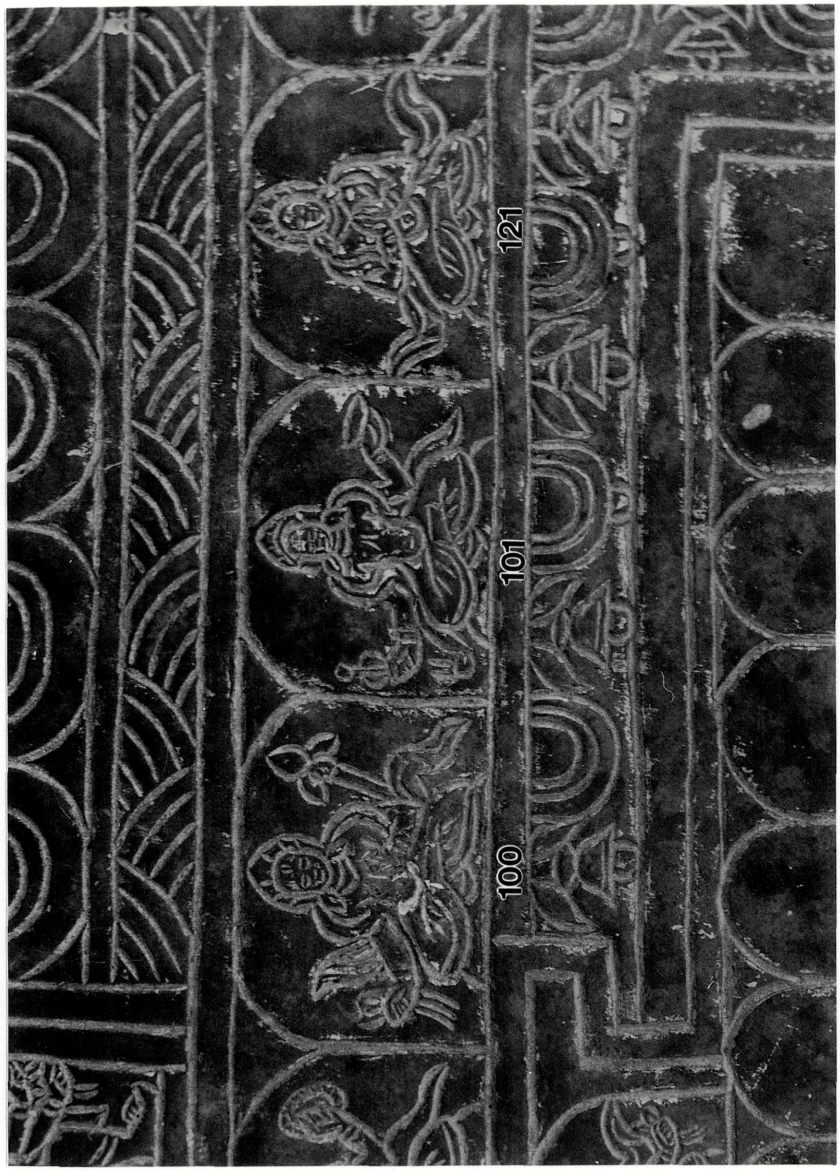

図26　ハク・バハール・マンダラ Haka Bahal Maṇḍala

図27　ハク・バハール・マンダラ Haka Bahal Maṇḍala

図28　ハク・バハール・マンダラ Haka Bahal Maṇḍala

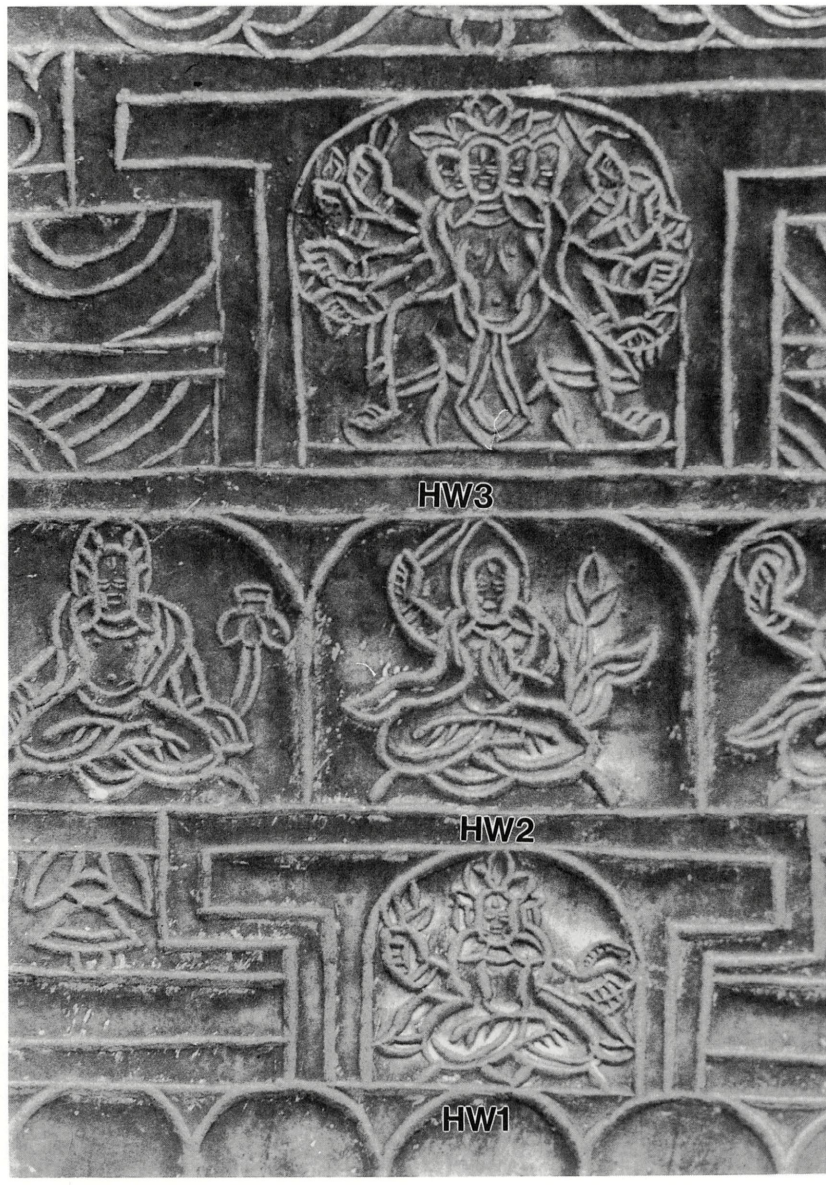

図29　ハク・バハール・マンダラ Haka Bahal Maṇḍala

図30　ハク・バハール・マンダラ Haka Bahal Maṇḍala

図31　ハク・バハール・マンダラ Haka Bahal Maṇḍala

図32　ハク・バハール・マンダラ Haka Bahal Maṇḍala

図33　ハク・バハール・マンダラ Haka Bahal Maṇḍala

図34　ハク・バハール・マンダラ Haka Bahal Maṇḍala

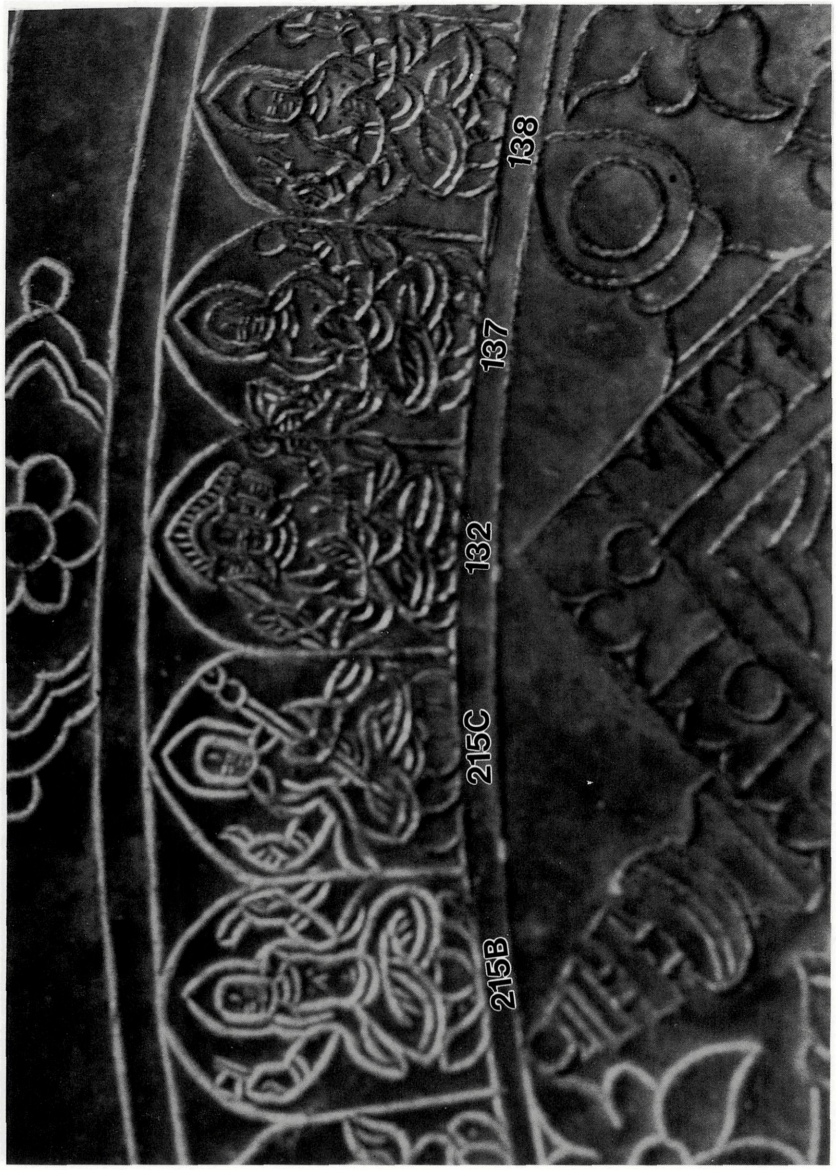

図35　ハク・バハール・マンダラ Haka Bahal Maṇḍala

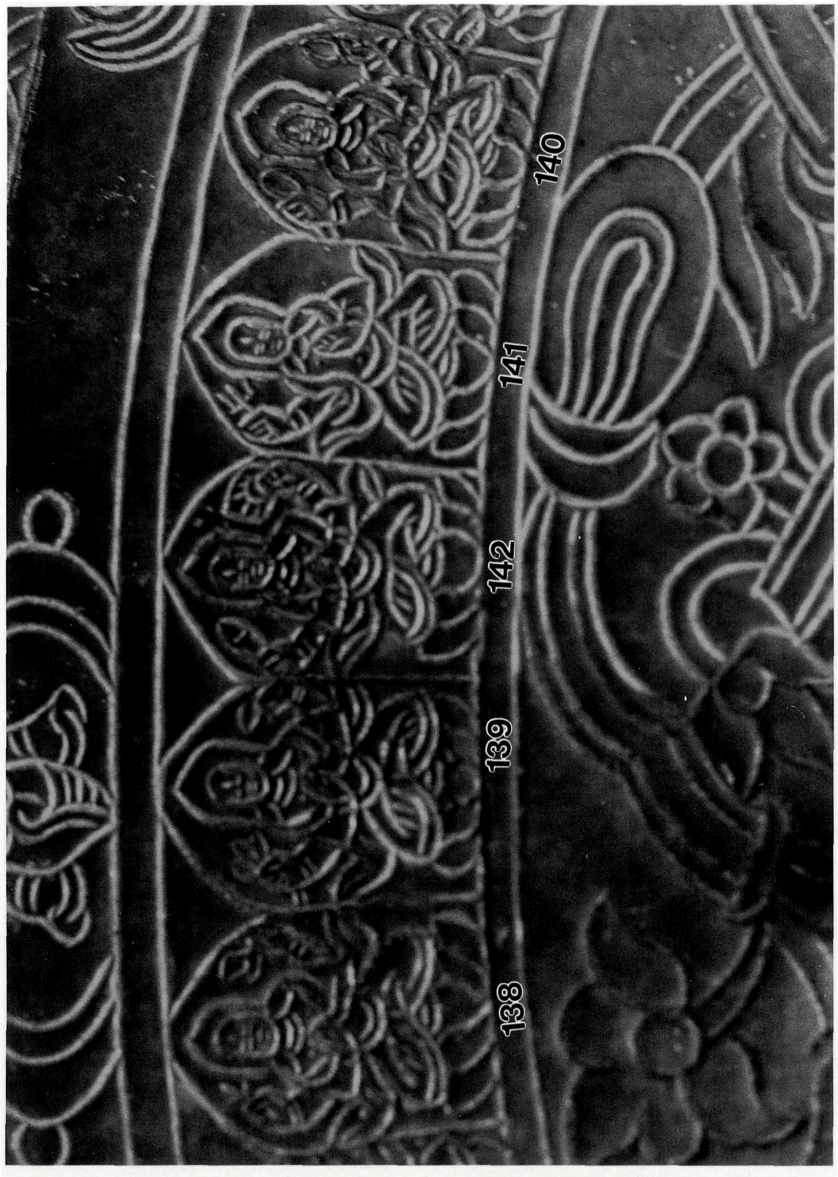

図36　ハク・バハール・マンダラ Haka Bahal Maṇḍala

図37　ハク・バハール・マンダラ Haka Bahal Maṇḍala